

14 家族に関する意識

NFRJ03では、家族に関する意識を家庭内での性別役割に関する意識、離婚をめぐる意識、性規範、老親扶養、無配偶者の結婚意向、子どもをもつ希望の側面からとらえている。こうした意識は、近年大きく変化している。本章では、その変化の様相を性別および出生コホート別に概観する。

14-1 家庭内での性別役割に関する意識

1) 性別役割分業

「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という性別役割分業意識は、20世紀をとおして劇的に変化した意識のひとつである。図14-1のように、われわれの対象者で見ると、コホートごとに賛否は大きく異なる。男女とも年長のコホートでは、8割が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と賛成している。他方、若年コホートでは6割が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と反対している（男女ともコホート間の差は0.1%水準で有意）。

女性の場合、コホート間の差は2箇所で見られる。まず1931-35年と1936-40年の間である。前者で65%であった賛成の比率が、後者では53%にとどまる。また、1941-45年と1946-50年の間にも大きな差がみられる。後者の賛成比率は37%にとどまり、63%が反対としている。このように、1935年以前コホート、1936-45年コホート、1946年以降コホートの3つにくることができる。順に3分の2が賛成、半数が賛成、3割のみが賛成となっている。賛成のうち「そう思う」に着目すると、よりコホート間の差は顕著である。女性で見ると、年長の1935年以前コホートでは3割であるのに対し、1936-45年コホートでは1割程度、1946年以降コホートでは、数パーセントにすぎない。調査時点で50歳未満の層では、性別役割分業を積極的に支持する者はほとんどいないといってもよい。

また男女で比較すると、全体ならびに1926-30年コホートを除くすべてのコホートで、男性の方が女性よりも賛成の比率が高い（男女全体で0.1%水準で有意）。

NFRJ98と比較すると、表14-1のように、男女とも「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の比率が、NFRJ98の方が高い。反対に「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の比率が、NFRJ03で高い。性別役割分業意識は、全体で見ると弱体化している。

表 14-1 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである (％)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう 思わない
男性	NFRJ03	2942	15.4	37.2	22.2	25.2
	NFRJ98	3323	23.5	39.3	16.9	20.3
女性	NFRJ03	3313	10.7	32.4	25.8	31.1
	NFRJ98	3662	15.5	34.5	21.5	28.5

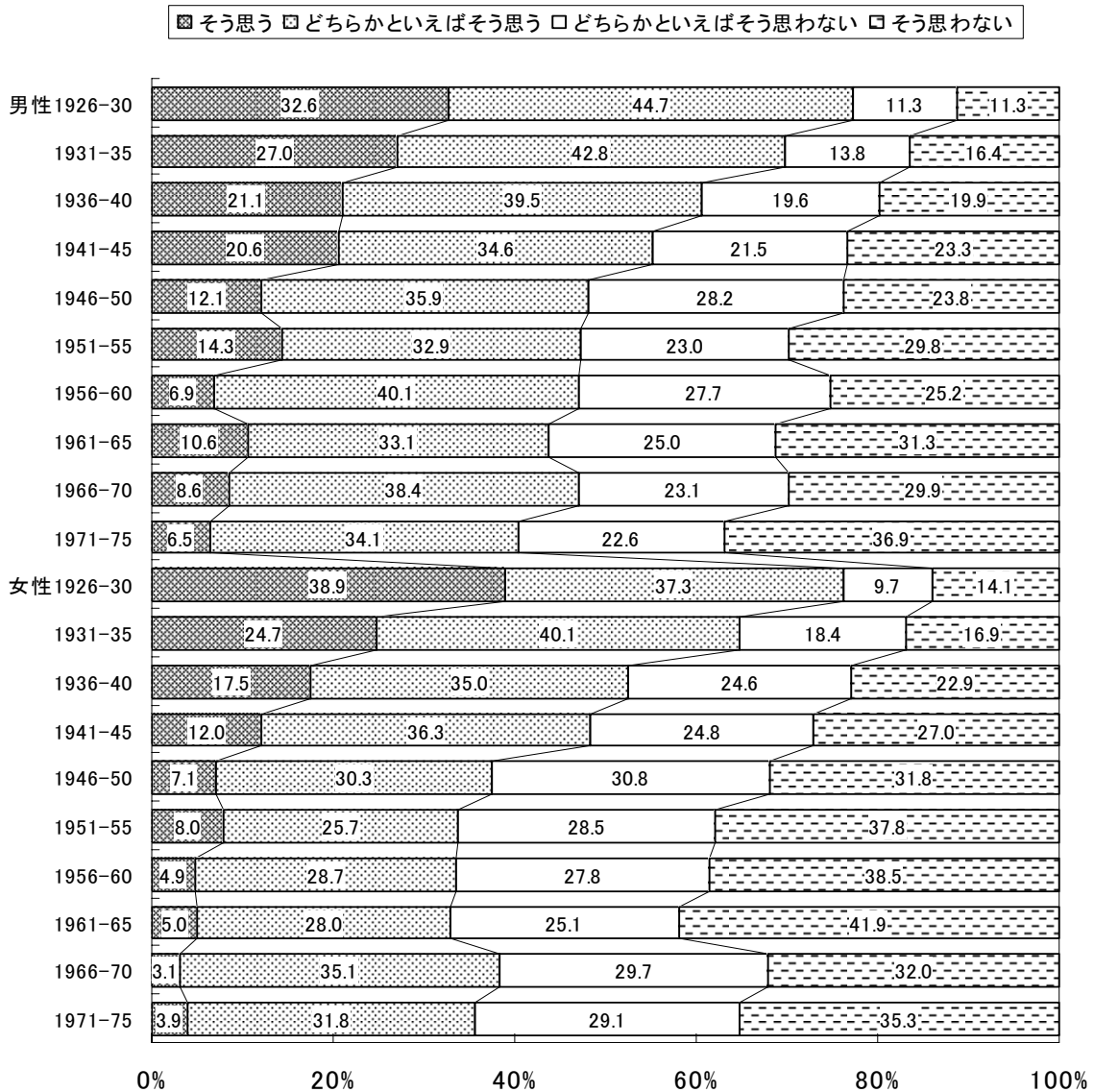


図 14-1 「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」賛否

男女 $p < .001$
 男性・コーホート $p < .001$
 女性・コーホート $p < .001$

2) 女性の育児責任

他方、家族内の性別役割分業に関する意識のうち女性の育児責任に関する規範を、いわゆる「3歳児神話」といわれる「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだ」からみよう。全体では、男女とも8割弱が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と賛成している。

コーホートごとにみると、性別役割分業ほど顕著ではないものの、類似の傾向がみられる。すなわち図14-2のように、男女とも1945年以前の年長4コーホートでは賛成の比率が80%をこえるのに対し、1946年以降のコーホートではその比率は低下し、1966年以降のコーホートでは6割程度にとどまる（男女ともコーホート間の差は0.1%水準で有意）。また「そう思う」の比率では女性の場合、性別役割分業と同じく1935年以前コーホート、1936-45年コーホート、1946年以降コーホートの3グループ間で、水準が大きく異なっている。年長2コーホートで5割強、中間2コーホートで4割強、後続コーホートでは4割を下回る。

また、若年コーホートでは、女性よりも男性に賛成の比率が若干高い傾向がある。

3) 男性の稼得責任

つぎに男性の稼得責任、「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」についての賛否をみよう。図14-3のように、全体としてみると、女性の育児責任と同じく賛成率は高い。コーホート別の推移では、育児責任とほぼ等しい傾向がみられる（男女ともコーホート間の差は0.1%水準で有意）。

ただし男性の稼得責任に関しては、コーホート間での男女差が大きいことが注目される。男性全体では賛成率は80%であるのに対し、女性全体では68%にとどまる（男女全体で0.1%水準で有意）。コーホート内での男女差は、1951-55年、1956-60年、1961-65年、1966-70年の4コーホートでとりわけ高い。さらにこれらの男女差は「そう思う」の比率の差によるものである。たとえば、1951-55年コーホートでは、男性では78%が賛成しているのに対し、女性では64%にすぎない。「そう思う」の比率でみると、男性34%に対して女性21%にとどまり、13ポイントの差である。

このように、家庭内での性別役割に関する意識を3項目からみてきた。いずれの項目についてもコーホート間では、賛成が多数を占める状況から、その比率が低下する傾向が示された。とりわけ、性別役割分業に関する項目で顕著であった。大まかには、1935年以前コーホート、1936-45年コーホート、1946年以降コーホートの3つにくることができる。

また、いずれの項目についても、コーホート内で女性よりも男性に賛成の比率が一貫して高い傾向がみえた。とりわけ男性の稼得責任で顕著な男女差がみられた。

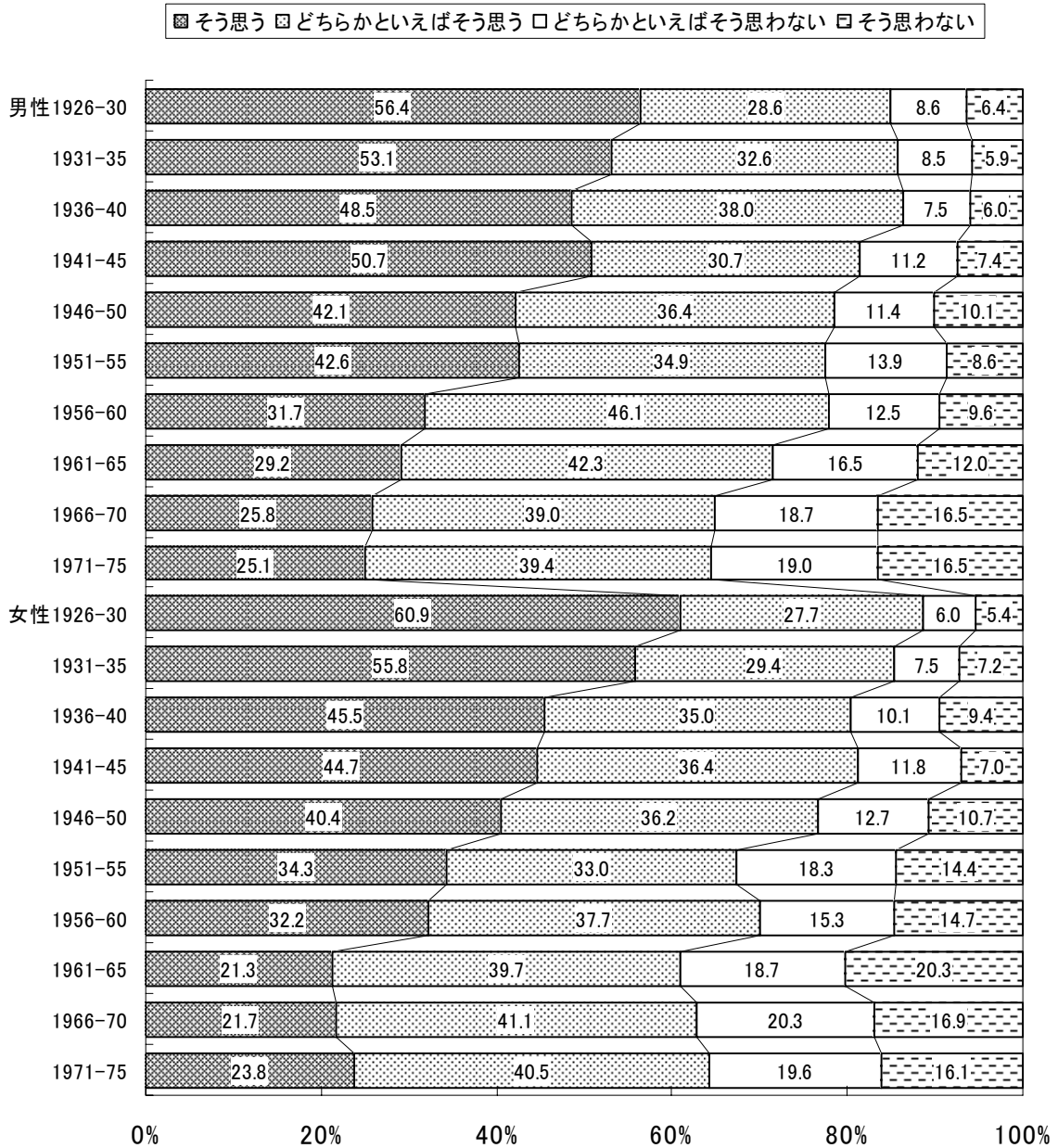


図 14-2 「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念すべきだ」賛否

男女 $p < .001$
 男性・コホート $p < .001$
 女性・コホート $p < .001$

■ そう思う □ どちらかといえばそう思う ○ どちらかといえばそう思わない □ そう思わない

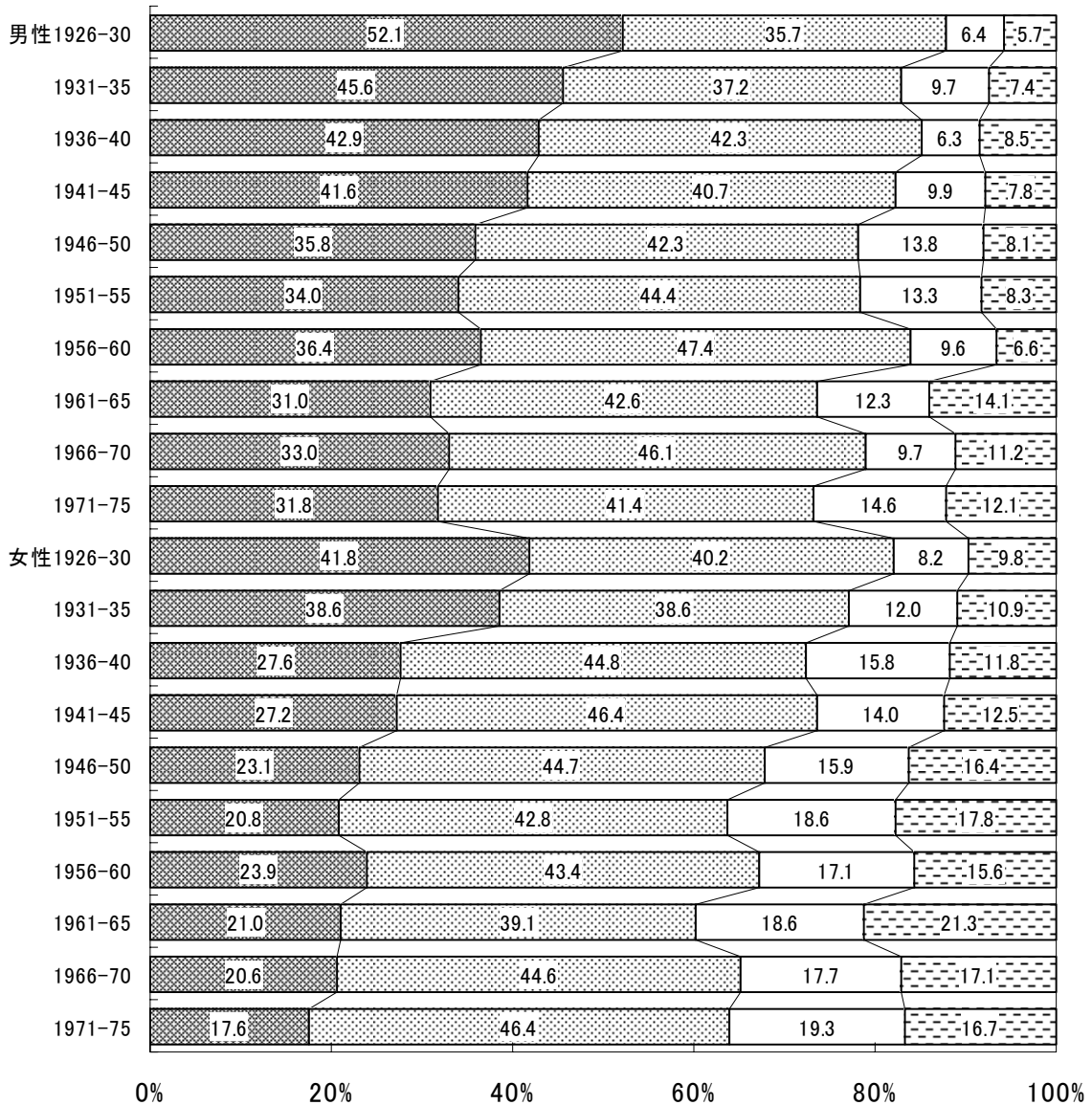


図 14-3 「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」賛否

男女 $p < .001$
 男性・コホート $p < .001$
 女性・コホート $p < .001$

14-2 離婚をめぐる意識

離婚に関する意識では、「愛のない夫婦は離婚すべきだ」という意見を取りあげた。図 14-4 のように、全体としてみるとこの意見についての賛否は賛成 6 割、反対 4 割に分かれる。コーホートや男女間で、明確な傾向は認められない。NFRJ98 と比較すると、表 14-2 のとおり、男女とも「そう思う」の比率が低下し、「どちらかといえばそう思わない」の比率が上昇している。

表 14-2 愛のない夫婦は離婚すべきだ (％)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう 思わない
男性	NFRJ03	2926	23.0	35.4	27.1	14.5
	NFRJ98	3323	28.7	37.0	20.5	13.9
女性	NFRJ03	3284	19.5	36.8	28.5	15.2
	NFRJ98	3662	26.2	36.1	23.5	14.2

また、この意見については、表 14-3 のように、配偶状態による有意差が認められた（男女とも配偶状態での差は 0.1%水準で有意）。すなわち、有配偶グループでは賛成の比率は 5 割程度、賛成派と反対派とにほぼ二分されている。「そう思う」は 2 割にとどまり、「どちらかといえばそう思わない」比率が 3 割と高い。未婚グループでも、それほど賛成率は高くない。この 2 グループに対して、離別グループでは、4 割近くが「そう思う」とし、「どちらかといえばそう思う」と合わせると、7 割を超えている。男女別と組み合わせると、賛成率をもっとも高いのは「離別・男性」で 72%となる。ついで「離別・女性」71%、「未婚・女性」67%、もっとも低いのが「有配偶・女性」で 54%である。

表 14-3 愛のない夫婦は離婚すべきだ（配偶状態別） (％)

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう 思わない
男性	全体	2925	23.0	35.4	27.1	14.5
	有配偶	2443	21.7	35.7	28.2	14.4
	死別	75	40.0	21.3	20.0	18.7
	離別	104	40.4	31.7	13.5	14.4
	未婚	303	23.8	38.3	24.1	13.9
女性	全体	3283	19.5	36.8	28.5	15.2
	有配偶	2613	17.6	36.5	30.3	15.6
	死別	271	24.7	34.7	27.7	12.9
	離別	177	35.6	35.0	17.5	11.9
	未婚	222	22.5	44.6	17.1	15.8

男女 $p < .05$

男性・配偶状態 $p < .001$

女性・配偶状態コーホート $p < .001$

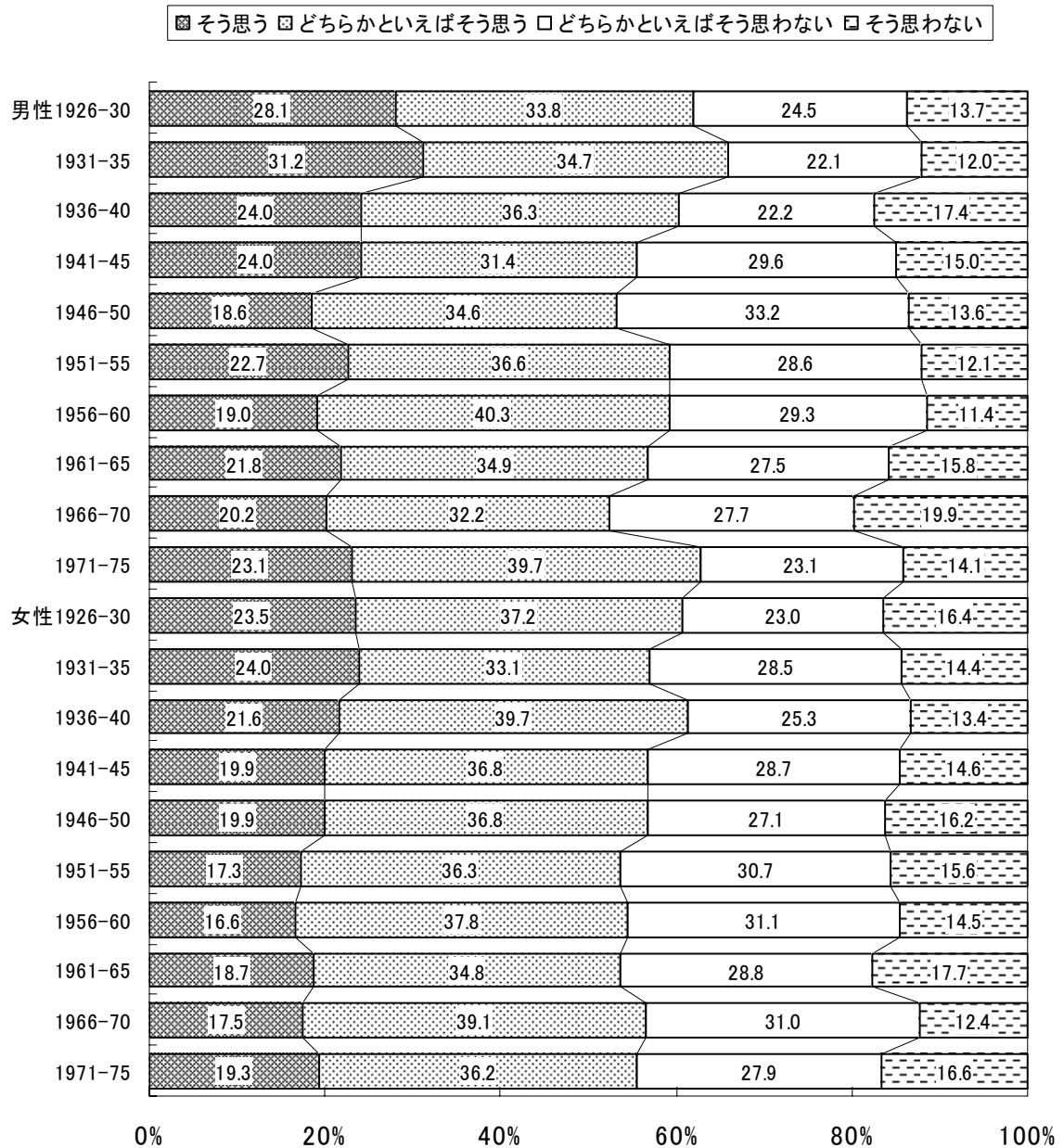


図 14-4 「愛のない夫婦は離婚すべきだ」賛否

男女 $p < .05$
 男性・コーホート $p < .01$
 女性・コーホート n. s.

14-3 性規範

未婚者の性関係については、「未婚者でも、お互いに強い愛情があれば、性的な関係をもってもかまわない」という意見への賛否をたずねた。図 14-5 のように、性規範に関する意識は、性別役割分業に関する意識以上にコーホート間で劇的に異なっている（男女ともコーホート間の差は 0.1%水準で有意）。さらに、コーホート間の差異は男性よりも女性において顕著である。

女性について具体的にみると、賛成の比率は 1945 年以前コーホートでは 3 割に満たないのに対し、1946-50 年コーホートで 36%、1951-55 で 45% と高くなり、その後の 4 コーホートでは 60% を超えている。もっとも若年の 1971-75 年コーホートでは 80% に達する。さらに 1966-70 年、71-75 年の 2 コーホートでは同一コーホートの男性よりも高い。また、「そう思う」の比率では、1951-55 年で 11% にとどまるのに対し、1971-75 年で 37% にもおよぶ。反対に「そう思わない」比率は、最年長の 49% に対し、9% にとどまる。このように、年長の女性は性規範について男性よりも厳しい意見を示しているが、若年コーホートにおいて急速に許容度が高まり、後続コーホートでは男性のそれを超えている。

NFRJ98 と比較しておくくと、男女とも賛成、反対の比率は大差ない（表 14-4）。

表 14-4 未婚者でも、お互いに強い愛情があれば、性的な関係をもってもかまわない

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう 思わない
男性	NFRJ03	2912	19.5	32.4	23.6	24.4
	NFRJ98	3323	21.8	30.8	19.3	28.1
女性	NFRJ03	3269	15.0	32.3	24.3	28.4
	NFRJ98	3662	16.5	26.3	22.4	34.8

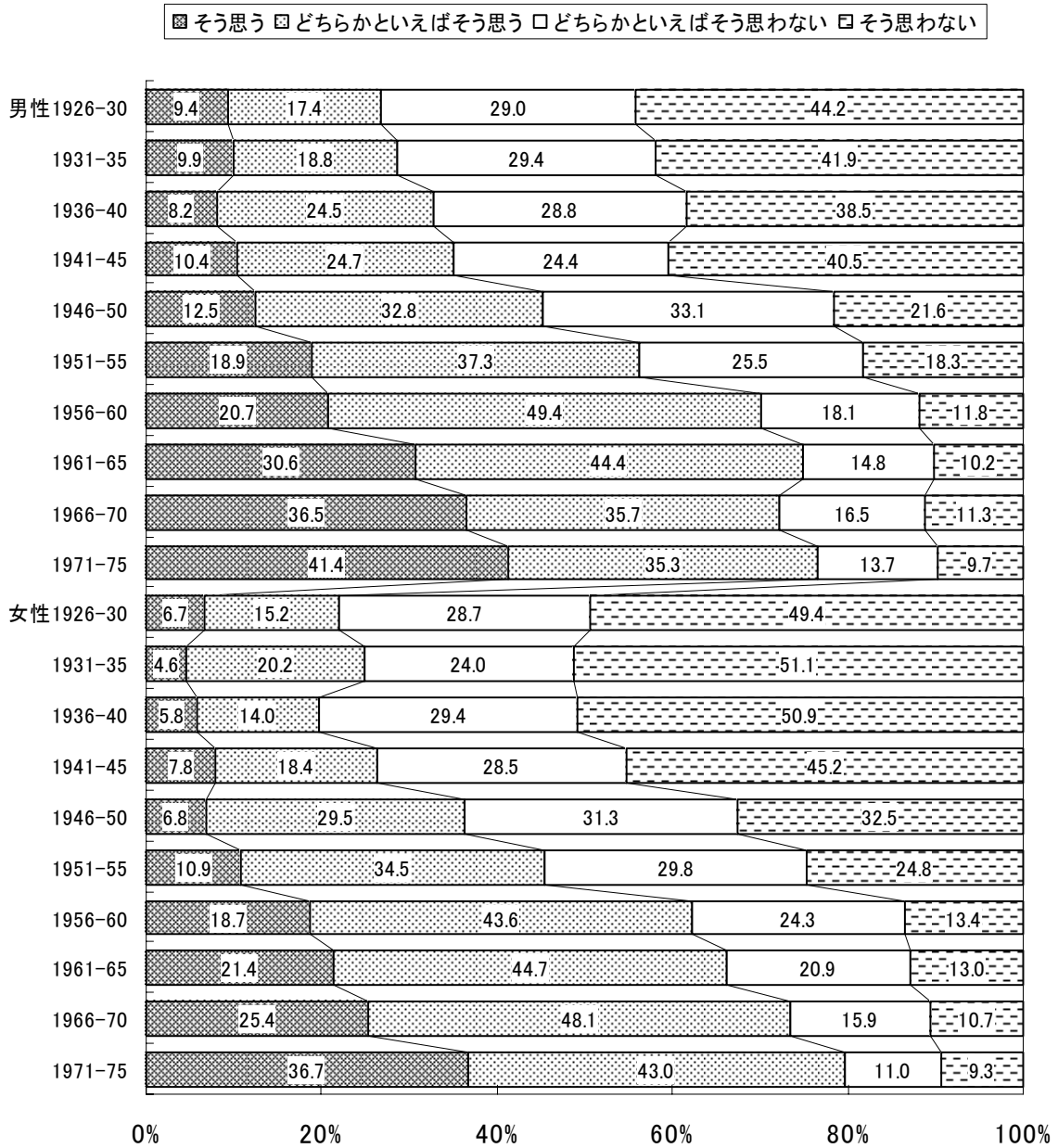


図 14-5 「未婚者でも、お互いに強い愛情があれば性的な関係をもってもかまわない」賛否

男女 $p < .001$
 男性・コホート $p < .001$
 女性・コホート $p < .001$

14-4 老親扶養

1) 同居規範

老親扶養をめぐるっては、同居規範、経済的扶養規範、身体的介護規範の3側面を設定した。同居規範からみていこう。「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」とたずねた。図 14-6 のように、全体では男性の 60%、女性の 55%が賛成している。しかし、男女ともコーホートによって賛成の比率は異なっている（男女ともコーホート間の差は 0.1%水準で有意）。また、最年長コーホートを除くコーホートでは女性よりも男性で賛成の比率が高い。

コーホートによる特徴は、年長コーホートと若年コーホートで賛成の比率が高く、中間のコーホートで低いということである。男女とも 1936-40 年から 1956-60 年までの 5 コーホートで賛成の比率が低い。とりわけ女性では 5 割を下回っている。もっとも低いのは 1951-55 年コーホートの女性であり、賛成比率は 47%にとどまる。24%が「そう思わない」としている。これに対し、若年コーホートでは 6 割を超えており、なかでも 1971-75 年コーホート男性では 71%にも達する。

年長コーホートと中間コーホートの差には規範意識の変化が、中間コーホートと若年コーホートの差にはライフステージの違いが反映されているのかもしれない。

NFRJ98 と比較すると、表 14-5 にあるように、「そう思う」の比率は NFRJ03 で低い。かわって「どちらかといえばそう思わない」の比率が高い。

表 14-5 親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ

		N	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう 思わない
男性	NFRJ03	2925	20.7	39.4	24.4	15.5
	NFRJ98	3323	23.2	42.7	17.5	16.7
女性	NFRJ03	3297	15.0	39.9	25.9	19.2
	NFRJ98	3662	19.6	36.9	21.7	21.8

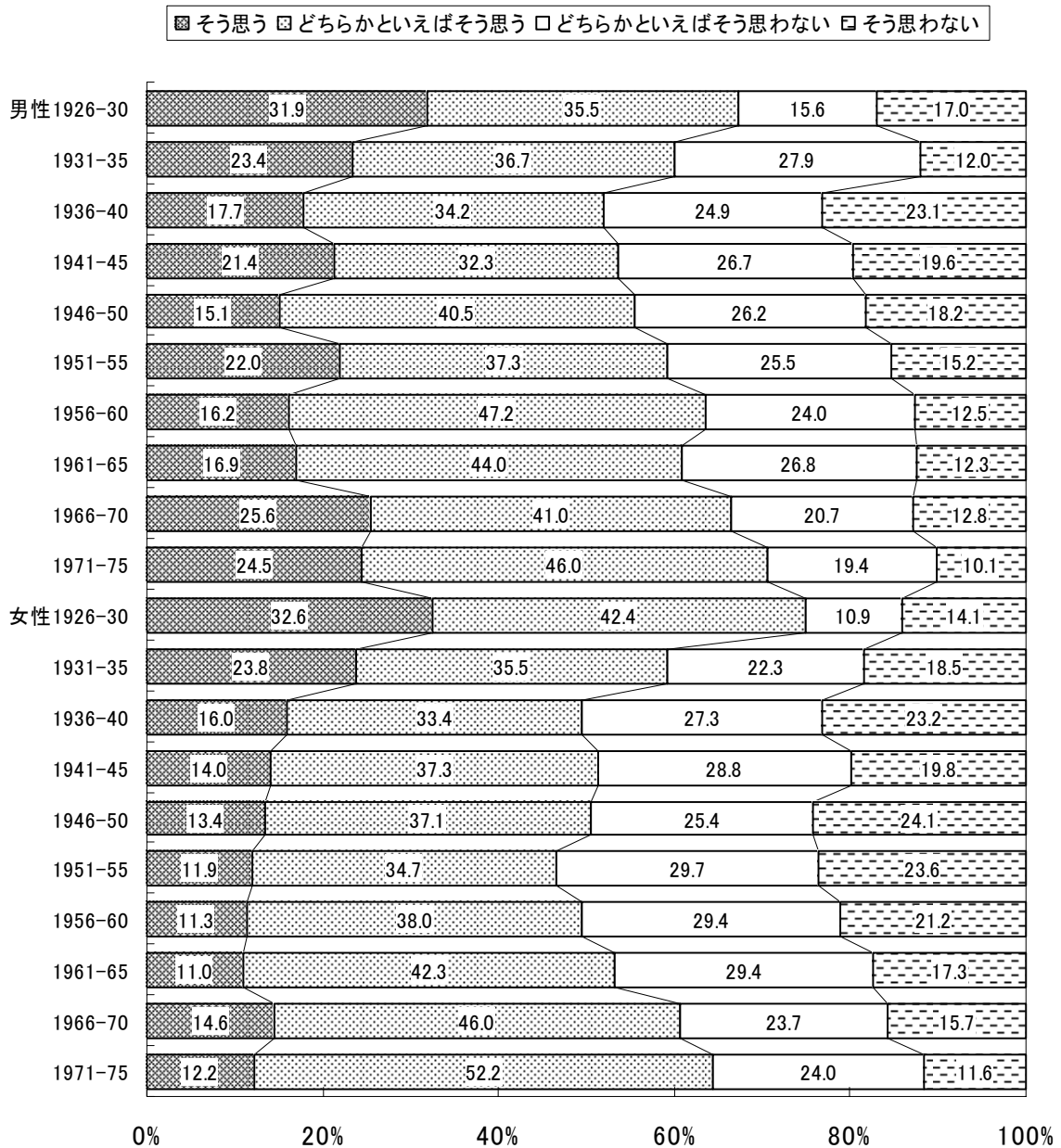


図 14-6 「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」賛否

男女 $p < .001$
 男性・コーホート $p < .001$
 女性・コーホート $p < .001$

2) 経済的扶養規範

さらに、経済的扶養に関する意識では、「年をとって収入がなくなった親を扶養するのは、子どもの責任だ」としてたずねた。図 14-7 のように、全体としては男女ともに賛成の比率は同居規範以上に高い。男性の 72%、女性の 67% が賛成している。またこの項目についても、同居規範ほど顕著ではないが、年長コーホートと若年コーホートで賛成率が高く、中間コーホートで低い傾向がみられる（コーホート間の差は、男性は 5% 水準、女性は 0.1% 水準で有意）。男女による差異は、中間コーホート以外は、一貫していない。

3) 介護規範

最後に身体的介護に関する規範意識をたずねた。「親が寝たきりなどになった時、子どもが介護するのは当たり前のことだ」という設問である。この項目は、3 項目のなかでもっとも賛成の比率が高い項目である。全体では、図 14-8 にあるように、男性の 78%、女性の 70% が賛成している。コーホートごとの特徴は、これまでの 2 項目と同様の傾向を示しているが、男女差はもっとも大きい。

女性の場合、最年長の 1926-30 年コーホートで「そう思う」41%、「どちらかといえばそう思う」44% と賛成が 85% を超えている。しかし、1931-35 年から 1951-55 年の 5 コーホートでは、「そう思う」2 割、「どちらかといえばそう思う」4 割と、賛成の比率は 6 割程度にとどまる。同一コーホートの男性が 7 割を超えていることとは対照的である。また、若年コーホート男性では 80% を超えている点も注目される。

以上のように、老親扶養に関して、同居規範、経済的援助規範、介護規範の 3 点から意識をみたところ、規範意識は、全体として介護規範がもっとも強く、ついで経済的援助規範となり、同居規範がもっとも弱かった。注目される点は、いずれの項目についても、中間コーホートで賛成比率が低いこと、いずれのコーホートでも男性の方が女性よりも賛成比率が高いことの 2 点である。本人のみならず配偶者の親を含め、老親扶養がより現実的であろう年齢にあるコーホートで規範意識が弱いこと、ならびに、これまでの老親扶養の実態からみて主たる介護者となる女性よりも男性に規範意識が強いことは、興味深い。

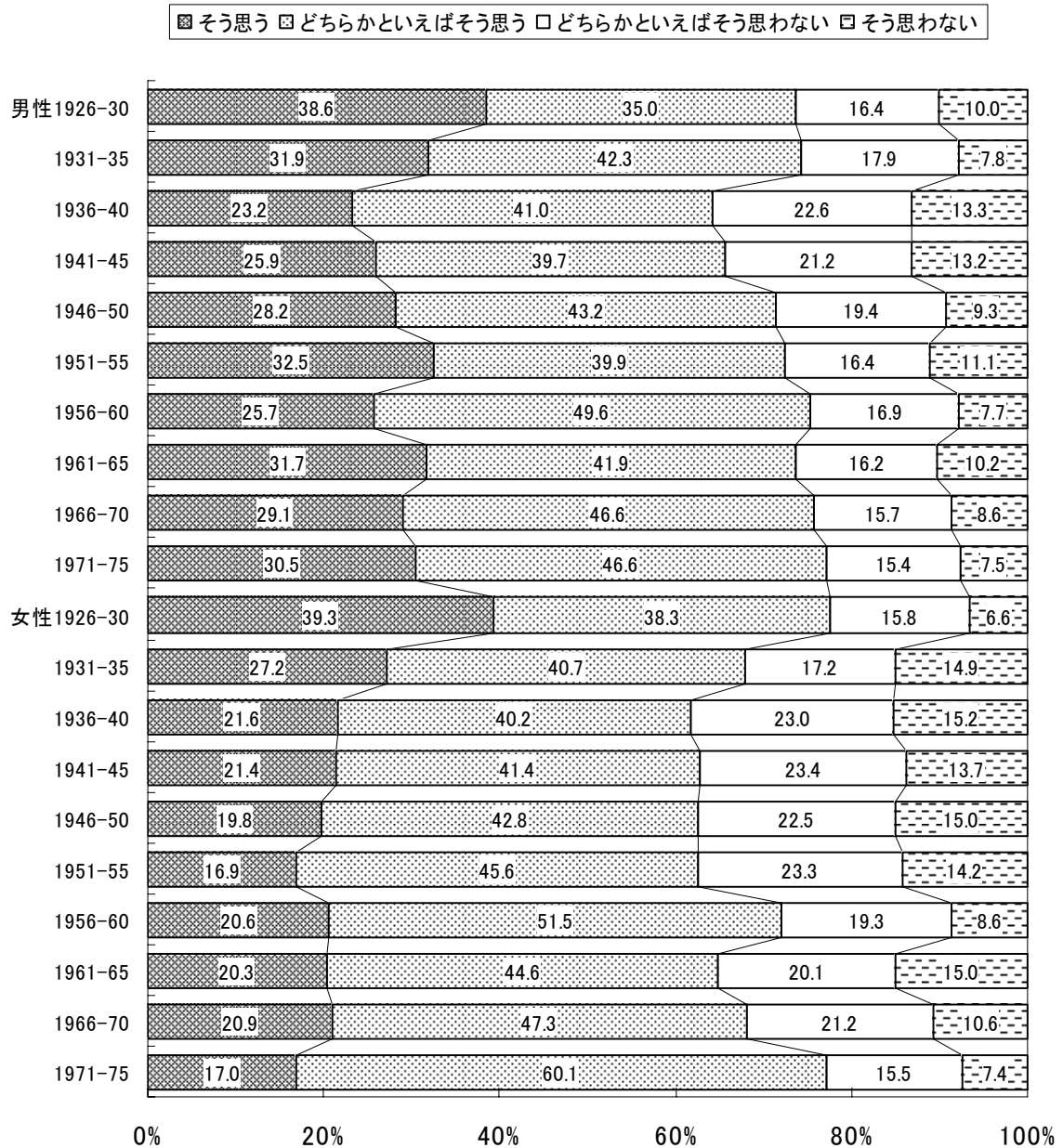


図 14-7 「年をとって収入がなくなった親を扶養するのは、子どもの責任だ」賛否

男女 $p < .001$
 男性・コーホート $p < .05$
 女性・コーホート $p < .001$

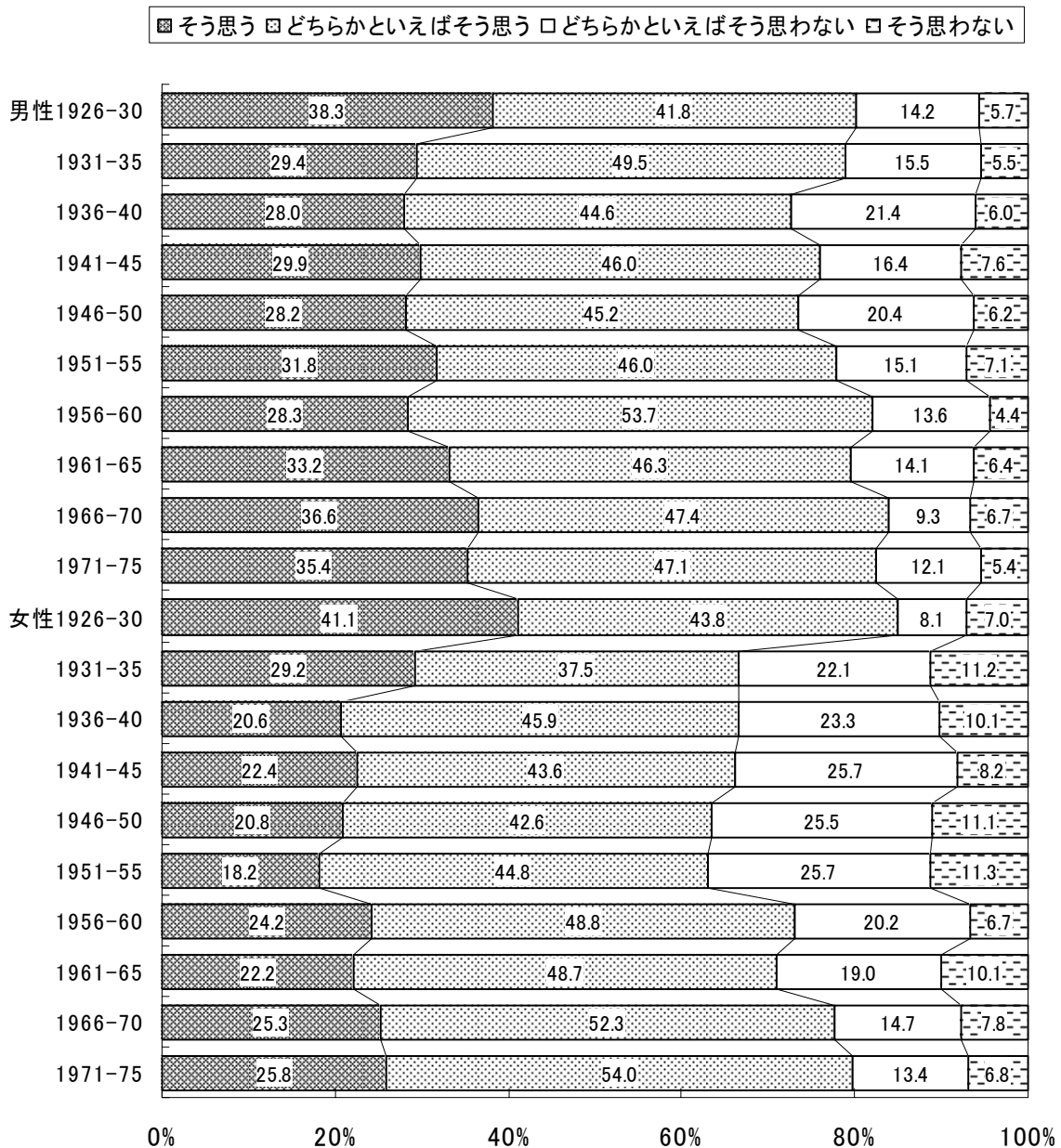


図 14-8 「親が寝たきりなどになった時、子どもが介護するのは当たり前のことだ」賛否

男女 $p < .001$
 男性・コーホート n. s.
 女性・コーホート $p < .001$

14-5 無配偶者の結婚意向

調査時点で無配偶の者に対して、「今後結婚したいと思いますか」と尋ねたところ、表 14-6 のような結果となった。全体で見ると、女性よりも男性に結婚希望の比率が高い。「絶対したい」「なるべくしたい」を合わせると 58%である。女性は 38%にとどまる。これをコーホート別にみると、明らかに若年コーホートには結婚意向が強く、年長コーホートで弱いことがみてとれる。最若年 1971-75 年コーホート（28-32 歳）では、2 割近くが「絶対したい」、4 割強が「なるべくしたい」としており男女差はない。しかし、このコーホートに先行する 2 コーホートでは、男性は依然として高い意向を示しているが、女性では「絶対したい」はほとんどみられず、「なるべくしたい」も 1966-70（33-37 歳）で 34%と高いが、1961-65（38-42 歳）では 18%にとどまる。

これを結婚上の地位別にみておくと、表 14-7 のとおり、女性の離別経験のある無配偶者で結婚意向が弱い。男性の場合には、離別経験のある無配偶者と未婚者との差はそれほど大きくはない。

表 14-6 無配偶者の結婚意向 (％)

	N	絶対したい	なるべく したい	どちらとも いえない	あまり したくない	絶対 したくない
男性 全体	269	14.9	42.8	35.7	5.6	1.1
1956-60(43-47 歳)	32	3.1	50.0	28.1	15.6	3.1
1961-65(38-42 歳)	50	14.0	34.0	46.0	6.0	-
1966-70(33-37 歳)	68	14.7	36.8	39.7	5.9	2.9
1971-75(28-32 歳)	119	18.5	47.9	31.1	2.5	-
女性 全体	253	9.1	28.9	42.3	15.4	4.3
1956-60(43-47 歳)	40	-	2.5	55.0	35.0	7.5
1961-65(38-42 歳)	56	3.6	17.9	60.7	10.7	7.1
1966-70(33-37 歳)	56	1.8	33.9	42.9	17.9	3.6
1971-75(28-32 歳)	101	19.8	42.6	26.7	8.9	2.0

男女 $p < .001$

男性・コーホート $p < .05$

女性・コーホート $p < .001$

表 14-7 無配偶者の結婚意向（結婚上の地位別） (％)

	N	絶対したい	なるべく したい	どちらとも いえない	あまり したくない	絶対 したくない
男性 全体	269	14.9	42.8	35.7	5.6	1.1
無配偶(死別)	1	-	100.0	-	-	-
無配偶(離別)	39	2.6	43.6	38.5	10.3	5.1
未婚	229	17.0	42.4	35.4	4.8	0.4
女性 全体	253	9.1	28.9	42.3	15.4	4.3
無配偶(死別)	7	-	-	28.6	42.9	28.6
無配偶(離別)	86	2.3	15.1	46.5	29.1	7.0
未婚	160	13.1	37.5	40.6	6.9	1.9

男女 $p < .001$

男性・結婚上の地位 $p < .10$

女性・コーホート $p < .001$

* 期待度数 5 未満のセルが多いため、有意差は参考程度

14-6 子どもをもつ希望と希望子ども数

1) 子どもをもつ希望

本調査では、1956年以降出生者全員に対し「子どもを（もう1人）ほしいと思いますか」と尋ね、「絶対ほしい」「ほしい」と回答した者に対して、「（すでにいる子どもも含めて）全部で何人ほしいですか」と尋ねている。

表14-8は、性別・コーホート別にみた希望である。「絶対ほしい」とする比率は、年長コーホートで低く、後続コーホートで高い。女性よりも男性で高い（男女ともコーホート間の差は0.1%水準で有意）。「ほしい」を合わせた比率でみると、男性では、1966-70年コーホートで45.7%、1971-75年コーホートで58.2%となるのに対し、女性では、同順に26.7%、53.0%である。年長のコーホートでは「絶対ほしくない」比率が、女性でとりわけ高い。1956-60年コーホート（43-47歳）で41%に達する。

表14-8 子どもをもつ希望 (％)

	N	絶対ほしい	ほしい	どちらとも いけない	あまり ほしくない	絶対 ほしくない
男性 全体	1097	12.1	25.9	31.8	17.1	13.0
1956-60(43-47歳)	271	1.5	15.5	31.0	28.0	24.0
1961-65(38-42歳)	281	7.1	23.8	33.5	19.6	16.0
1966-70(33-37歳)	267	14.2	31.5	33.3	13.5	7.5
1971-75(28-32歳)	278	25.5	32.7	29.5	7.6	4.7
女性 全体	1392	7.4	17.7	31.3	18.8	24.8
1956-60(43-47歳)	324	1.2	9.0	28.1	20.4	41.4
1961-65(38-42歳)	380	2.4	9.5	32.6	23.7	31.8
1966-70(33-37歳)	352	7.7	19.0	33.2	21.3	18.8
1971-75(28-32歳)	336	18.8	34.2	30.7	9.2	7.1

男女 $p < .001$

男性・コーホート $p < .001$

女性・コーホート $p < .001$

こうしたコーホートによる差異は、すでに子どもをもっていることと関連している。そこで、子どもの有無別に希望をみよう（表14-9）。有子グループでは、男女ともに「どちらともいけない」「あまりほしくない」「絶対ほしくない」比率が高く、8割以上があてはまる。しかしコーホート間では異なっており、年長コーホートで希望が低く、若年コーホートで高い。また同一コーホート内では男性の方が、女性よりも希望が高い。

同様のコーホート間の趨勢が無子グループでもみられる。ただし無子グループの場合には、年長コーホートでは「どちらともいけない」に集中する傾向があり、「あまりほしくない」「絶対ほしくない」はそれほど高率ではない。若年コーホートでは、男女とも半数以上が「絶対ほしい」「ほしい」としている。全体として「絶対ほしい」の比率がもっとも高いのは、無子1971-75年コーホート男性27%、ついで同女性24%、有子1971-75年コーホート男性23%、無子1966-70年コーホート男性19%となる。

表 14-9 子どもをもつ希望（子ども有無別） (％)

	N	絶対ほしい	ほしい	どちらともいえない	あまりほしくない	絶対ほしくない
男性 有子	732	8.5	21.7	29.2	22.4	18.2
1956-60(43-47 歳)	236	0.8	14.8	26.7	30.9	26.7
1961-65(38-42 歳)	217	6.9	18.4	32.3	23.0	19.4
1966-70(33-37 歳)	167	11.4	29.9	31.1	16.8	10.8
1971-75(28-32 歳)	112	23.2	30.4	25.9	11.6	8.9
無子	342	18.7	34.2	37.7	6.7	2.6
1956-60(43-47 歳)	35	5.7	20.0	60.0	8.6	5.7
1961-65(38-42 歳)	61	6.6	44.3	36.1	8.2	4.9
1966-70(33-37 歳)	95	18.9	33.7	37.9	7.4	2.1
1971-75(28-32 歳)	151	26.5	33.8	33.1	5.3	1.3
女性 有子	1110	5.2	15.5	28.4	21.5	29.4
1956-60(43-47 歳)	290	1.4	9.3	24.5	21.0	43.8
1961-65(38-42 歳)	335	1.5	8.4	30.1	24.8	35.2
1966-70(33-37 歳)	285	6.7	16.1	30.2	25.3	21.8
1971-75(28-32 歳)	200	15.0	35.5	28.5	11.5	9.5
無子	270	16.3	26.3	43.0	7.8	6.7
1956-60(43-47 歳)	33	-	6.1	60.6	12.1	21.2
1961-65(38-42 歳)	43	9.3	18.6	48.8	16.3	7.0
1966-70(33-37 歳)	63	12.7	30.2	47.6	3.2	6.3
1971-75(28-32 歳)	131	24.4	32.1	34.4	6.1	3.1

男女 $p < .001$

男性・有子・コーホート $p < .001$ 無子・コーホート $p < .01$

男性・有子・コーホート $p < .001$ 無子・コーホート $p < .001$

2) 希望子ども数

では、子どもをもつ希望のある場合、全部で何人の子どもを希望しているのだろうか(すでにいる子どもを含めた人数)。表 14-10 のように、全体では半数が「2人」を希望している。ついで4割が「3人以上」となる。その内訳は圧倒的に「3人」である(4人以上を希望している者は7%にすぎない)。男女では、女性の方が若干「3人以上」の比率が高い。

コーホート別にみると、年長コーホートでは「3人以上」が多く、若年コーホートでは「2人」に集中する傾向がある。

表 14-10 希望子ども数 (％)

	n	1人	2人	3人以上
男性 全体	394	5.3	55.6	39.1
1956-60(43-47 歳)	35	2.9	40.0	57.1
1961-65(38-42 歳)	84	8.3	40.5	51.2
1966-70(33-37 歳)	115	1.7	60.0	38.3
1971-75(28-32 歳)	160	6.9	63.8	29.4
女性 全体	335	6.6	50.4	43.0
1956-60(43-47 歳)	30	6.7	23.3	70.0
1961-65(38-42 歳)	43	18.6	32.6	48.8
1966-70(33-37 歳)	90	2.2	53.3	44.4
1971-75(28-32 歳)	172	5.8	58.1	36.0

男女 $p < .001$ 男性・コーホート $p < .01$ 女性・コーホート $p < .001$

これを現在の保有子ども数別にみると、表 14-11 のように、現在「0人（無子）」の場合には、男性の 11%、女性の 20%が「1人」と希望子ども数は少ない。「1人」の場合には、男女とも 7割が「2人」すなわち「現在の子どもともう1人」を希望している。

表 14-11 希望子ども数（現在の保有子ども数別） (%)

		n	1人	2人	3人以上
男性	全体	379	5.3	55.1	39.6
	0人	175	11.4	70.3	18.3
	1人	114	-	75.4	24.6
	2人	79	-	-	100.0
	3人以上	11	-	-	100.0
女性	全体	331	6.6	50.2	43.2
	0人	113	19.5	63.7	16.8
	1人	130	-	72.3	27.7
	2人	79	-	-	100.0
	3人以上	9	-	-	100.0

男女 $p < .001$ 男性・子ども数 $p < .001$ 女性・子ども数 $p < .001$

*期待度数 5 未満のセルが多いため、有意差は参考程度

14-7 小括

ここまで、家族に関する意識を家庭内での性別役割に関する意識、離婚をめぐる意識、性規範、老親扶養、無配偶者の結婚意向、子どもをもつ希望の側面から、性別およびコーホート別に概観した。NFRJ03 においては以下の 4 点を特徴として整理できる。

家庭内での性別役割に関する意識に関しては、性別役割分業に関する項目でもっとも顕著であるが、コーホート間で賛成が多数を占める状況から、その比率が低下する傾向を示した。大まかには、1935 年以前コーホート、1936-45 年コーホート、1946 年以降コーホートの 3 つにくることができる。また、コーホート内では女性よりも男性に賛成の比率が一貫して高く、とりわけ男性の稼得責任で顕著な男女差がみられた。

老親扶養に関する規範意識は、介護規範がもっとも強く、ついで経済的援助規範、同居規範がもっとも弱かった。中間コーホートで賛成比率が低いこと、コーホートでは男性の方が女性よりも賛成比率が高いことが、いずれの規範でも一貫して認められた。老親扶養の現実性が高いであろう年齢にあるコーホートで規範意識が弱いこと、ならびに主たる介護者となる女性よりも男性に規範意識が強い。

結婚意向は、若年コーホートで強く、年長コーホートで弱い。最若年 1971-75 年コーホート（28-32 歳）では、「絶対したい」2割、「なるべくしたい」4割にのぼり、男女差はない。しかし、それ以外のコーホートでは、女性よりも男性に結婚意向が強くみられる。

子どもをもつ希望も、女性よりも男性に強い。また年長コーホートよりも若年コーホートで希望者の比率が高い。とりわけ現在子どもをもっていない最若年コーホートでは、男女とも 4 分の 1 が「絶対ほしい」としている。希望者の希望子ども数は、半数が「2人」であり、すでに子どもがいる場合には、「あと 1人」希望する者が多い。